

【書評】



(財)政策科学研究所「あさってのオフィス」研究会編著
石井威望監修

着るオフィス「モバイル」から 「ウェアラブル」へ

中央公論社
ISBN4-12-003035-0

評者：(株)スリーディー 加納裕



本書は、後書きにもあるように、株式会社関電工の支援を受け、財団法人政策科学研究所に設置された「あさってのオフィス研究会」が約一年半にわたり行った研究活動を取りまとめたものである。

インターネットやモバイル端末の爆発的普及により、従来のオフィス形態が変化していく。自宅から決められたオフィスに向かい、そのオフィスの決められた場所でいつもの仲間と共に終日働き、終わると自宅に帰る、という旧来型勤務形態から、モバイル端末を携帯し、いつでもどこでも常にプロジェクトチームと連絡を取り合える環境を維持することにより、これまではオフィスとは見なされなかった場においても、仕事を円滑に進められるようになる。このような場の集合体が「明日のオフィス」である。それでは「あさってのオフィス」はどうなるのか。本書ではそれを解くキーワードは「ウェアラブル」にあるとする。「モバイル」が持ち歩く、であれば「ウェアラブル」は着る、である。ウェアラブル・コンピュータは「恒常性」「増幅性」「介在性」を持つと定義される。「恒常性」とは、システムが常に使える状態になっていることであり、「増幅性」とは、ワーカの仕事に対する能力を増幅することであり、「介在性」とは、ワーカ自身の情報と外界の情報との介在をすることである。このような情報機器を「着る」ことにより、人間自体の情報処理能力が増幅され、いわば「サイボーグ的」となる。このようなサイボーグ達が

周囲の環境至る所に埋め込まれたコンピュータと常に連携する、いわゆる「ユビキタス・コンピューティング」の恩恵を授かり、あたかもオフィスそのものを着ているかのようになる、と予測する。

本書の内容は技術論と社会科学論に分かれる。技術論としては、ウェアラブル・コンピュータの歴史や現時点での先端技術を丁寧に解説している。現在実用的な機器武装に言及した箇所は非常に具体的であり、明日にでもモバイルになれそうだが、比較的早く陳腐化する類の情報でもあり、その意味でも迅速な購読をお勧めする。

社会科学論では、SF的な世界を連想させるものもある。例えば「あさっての都市」は「センシング・シティ」になるという。各種センサーが都市や人間の周囲に遍在的に組み込まれた結果、「それまで実現できなかったような個別具体的情報にもとづくリアルタイムの適応型サービスが実現する」。それと「アーバン・シンクロナイゼーション」、つまり「都市の機能と人間の行動が感覚的にも共振し共鳴していく」ことが加わり、人間の行動原理が激変する。この変化は既に始まっているとの報告もあるが、ではそれに続く更なる変化とは何か。行動原理だけではなく、人間そのものも変化してしまうのではないだろうか。

その点では「オルタナティブ・オフィス最新事情」は妙な想像をすることなく読むことができた。米国企業の実際の試みを調査データを元に分析したもので、説得力を持

つ。私などは「この情報を元にオフィス改革だ!」とすぐに思ってしまう。興味を引いたキーワードは「オフィス・オン・ダイヤモンド」である。「必要な時に必要な形で必要なところに瞬時に出現するオフィス」。これが最良のオフィスであることに疑いはないが、「今日のオフィス」では魔術を使わない限りは実現できない。実際、文脈ではあくまでもホテリング等の社内ファシリティの一形態を指しているが、「あさってのオフィス」ではそもそも「オフィスを着ている」のであるから「オフィス・オン・ダイヤモンド」は自然に実現されるのである。

各章で分筆という形式を採っているので、単一著者の書物に比べ統一感に欠けるのは否めない。各著者のバックグラウンドの違いが顕著なことが原因であり、一気に読み通すには所々で頭の切り替えが必要かも知れない。用語の定義にも差異が見られる。例えばある筆者は「携帯電話」を「モバイル」と扱い、別の著者は「ウェアラブル」と捉えているかのようである。「ウェアラブル」より

も、それと通信すべき外的環境により重点を置く論調もあり、そのバランスもまちまちという印象を受ける。

ただ、これらは本書の価値を損なうものではない。扱うテーマ自体が予測不可能な難物であるし、むしろ、各章にてそれぞれのご専門の方々が独自の理論を展開しているので、おおいに楽しめる。250ページと小冊子ではあるが、ハンドブックの色彩を帯びており、各テーマにてより深い議論に進展できる下地を十分に提供している。個人的に仕事上でのモバイルのよりよい使い方を模索されている方々は勿論、新しい社内オフィス環境のあり方、更には外界も含めた広義のオフィス環境での業務形態のあり方について検討中の各種組織責任者の方々には、ご一読を勧める次第である。

装丁は内容を適切に表現しており、センスもよい。表題も魅力十分である。「アウェイ」から「ホーム」への満員電車の中で読んだが、この優れた情報源には電源の供給も不要であった。

松波謙一、内藤栄一共著

最新 運動と脳 体を動かす脳のメカニズム

サイエンス社

ISBN4-7819-0937-X

評者：東京大学 前田太郎

ライブラリ脳の世紀：心のメカニズムを探る 目
久保田 毅・酒田 英夫・松村 道一 編集

最新
運動と脳
体を動かす脳のメカニズム

松波 謙一・内藤 栄一 共著

体を動かす脳。

思い通りに体を操る私たちの脳。その
精巧なメカニズムを徹底的に解剖する!

サイエンス社

最初、学会事務局から「松波先生の『運動と脳』の書評をお願いします」と言われたときに、何故今頃あの本を? と思ってしまったことを告白しておく。そのとき思い浮かべたのは前著に当たる「運動と脳(紀伊国屋書店1985)」のほうで、こちらはかつて私自身も愛読し、工学部の学生達に入門書として繰り返し勧めてきた名著である。縦書きで専門外の学生が躊躇せずに手に取ることの出来る読み易さは生理学に抵抗を抱きがちな工学部の学生に人間をメカニズムとして捉えるための大脳生理学とい

う視点を伝えるのに格好の入門書であった。

こうした観点からの脳の機能的な解析は感覚系についての議論や入門書は比較的多く見られるのだが、運動系となると同様の構成をとる入門書の数は少ない。これは歴史的にはMarのVisionの存在が大きいのかも知れないが、生物の知覚系を工学的な画像情報処理技術に対応させた議論に持ち込むという視点については比較的早くから一般に普及していたということであろう。これに対して運動系の機能的解析は、感覚系に比して電気生理学的実験の